

實
驗
日
本
修
身
書
卷
六
尋
常
小
學
生
徒
用

T1A3

22

W46j

明治廿六年九月十八日
文部省檢定

三宅 朱告校閱
中根 淵 編纂
渡邊 政吉
實 驗
日本修身書卷六
尋常小學
生徒用

東京 金港堂書籍株式會社

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 9 2 2 1 a

福岡教育大學藏書

第一課 孝行

日月流るるが如し、親に事ふること久しかるべからず、故に子たらんものは、誠をつくり力をつくりて、及ばざらんことをせらるるが如くすべし。

昔京都に山田古嗣フルタツといふ人あり、幼くして母を失ひ、善く繼母ボカに事へ居たり。後に或る書をよみ、「樹静かならんとすれども風やまず、子養はんとすれども親いまさず」と

いへる所に至り、亡き母の事を思ひ出し、涙を流して書のぬるるをも覺にざりしとぞ。

父母の世にまします時に、孝行をつくさずは、後に悔ゆとも、かひなかるべし。

樹静かならんとすれども風やまず、子養はんとすれども親いまさず。

かひなりや親のいさめしふることを、

老いてぞさらに思ひしりぬる。

子をもちて知る親の恩。

第二課 孝行

孝行の心ふかきものは、
常に親を思ひて、寸時も
忘るることなり。

昔陸奥の國に、長薰と
いふ盲人あり、孝行の心
深く、人より食物を
貰^{モラ}へば、必ず其の半ば
を分ちて持ちかへり、



酒を貰へば、之を瓢^{ヒョウ}に入れ、たづさへかへりて
兩親に進む。父母は、年老いて家にのみあり
しかば、長薰は、常に自ら聞き得たる事を
話して、懇に其の心をなぐさめたり。又其の
常に往來する道に、危き橋ありしが、過ちて
水にぬちいり、親の心を煩はさんことをえられ、
故らに其の橋を渡らず、必ず川下に下りて、
浅き瀬をわたりたり。

一たび足をあぐるにも、敢て父母を忘れず。

第三課 兄弟

兄弟は両手の如く、長く相離るべからざるものなれば、常に和ぎ睦みて、互に其の繁榮をはかり、祝ふべきことあれば、祝ひあひ憂ふべきことあれば、憂へあひて、頼もしくすべし。

昔毛利元就、病みて死せんとする時、子供を集めて、束ねたる箭を折らしめしに、皆折ること能はざりしかば、改めて一本づつ折らしめしに、皆能く折りたり。元就子供に諭して、「あつまれば折れがたく、はなるれば折れやすし、兄弟も之に同じく、心をあはせ力をあはする時は、萬人の敵をもふせぐべし、我死したらん後も、汝等睦しく交りて、家を保ち國を治むべし」と誡めたり。其の子元春、隆景等、能く父の誡めを守りければ、其の家永く繁栄たり。兄弟は左右の手の如く、互に相助け相救ふべし。

第四課 兄弟

兄は弟を愛し、言ふ所行ふ所、弟の手本となるやうに睦しく教ふべし、又弟年頃にもなれば、其の身の立つやうに、はからふべし。弟は兄を先にして、我が身を後にし、すべて兄には、悌順^{テイジュン}をもてつかへ、共共父母に孝養をつくして、其の心をよるこばしむるを務めとすべし。

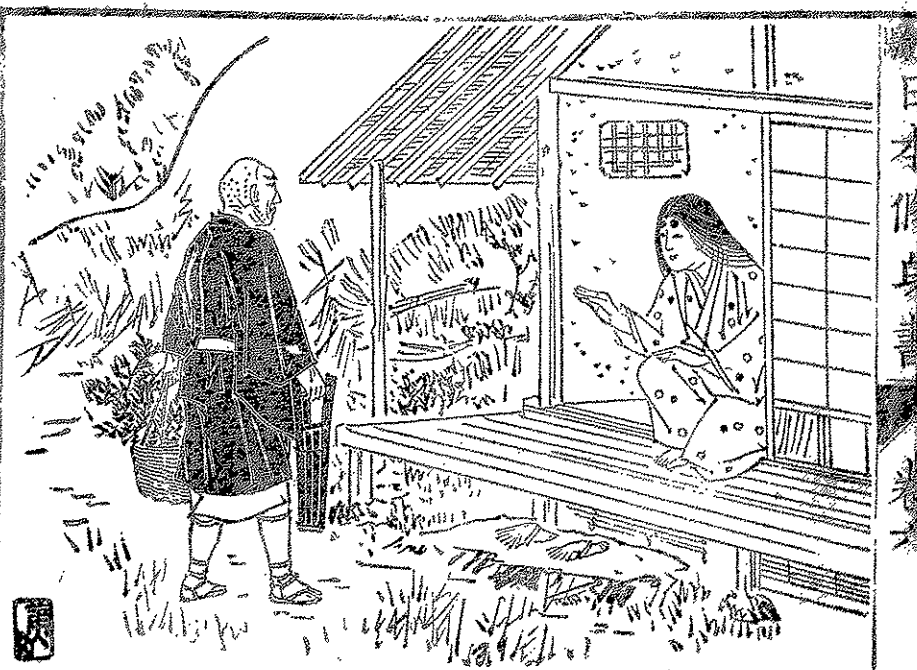
昔陸奥の國に、傳右衛門^{デンエモン}といふものあり、

父母年老いて家にありしが、能く孝養をつくしければ、二人の弟も、之を見習ひて、共に孝行をはげみ、兄弟三人和ぎ睦みてくらしたり。傳右衛門は、地面家屋を求めて、二人の弟に與へんといひしに、皆今暫く同居して、兄の業を助け、共に孝行をつくしたとて、肯はざりき。

埋み火のあたりのどかに同胞の、

まどおせし夜ぞこひりかりける。

第五課 婦徳



夫婦は、本他人なれば、
其の親しみたどろへ
やすし、されば常に禮
儀を重んじ、愛敬を旨
として、一すぢに和合
の道をはかるべし、殊
に婦たるものは、柔和
を第一とし、夫を助け、

内を治めて、能く父母舅姑に事ふべし。
土肥實平の妻は、賢くして慈悲の心ふかかり
人なり、能く内ををさめ、召し使ひのものを
あはれみたり。源頼朝始めて兵を起す時、
夫實平をすすめて、之にたがはしめ、其の
敗れて杉山にかくれし時は、竊に食物をねく
りて、饑乏をすくひ、又敵のありさまを告げ
知らせて、難をまぬかれしめたり。
夫婦相和し。

第六課 信義

天正の頃、荒木村重といふ人あり、織田信長に屬して、攝津の國を伐ちたがへけるが、明智光秀の爲めに讒せられ、伊丹の城に據りて信長にうむけり。時に其の友羽柴秀吉之を聞き、村重は、好みて謀叛するものにあらず」とて、信長に請ひて、其の城に入り、懇にときさといけるに、村重「御志のほどは、誠に有りがたけれども、

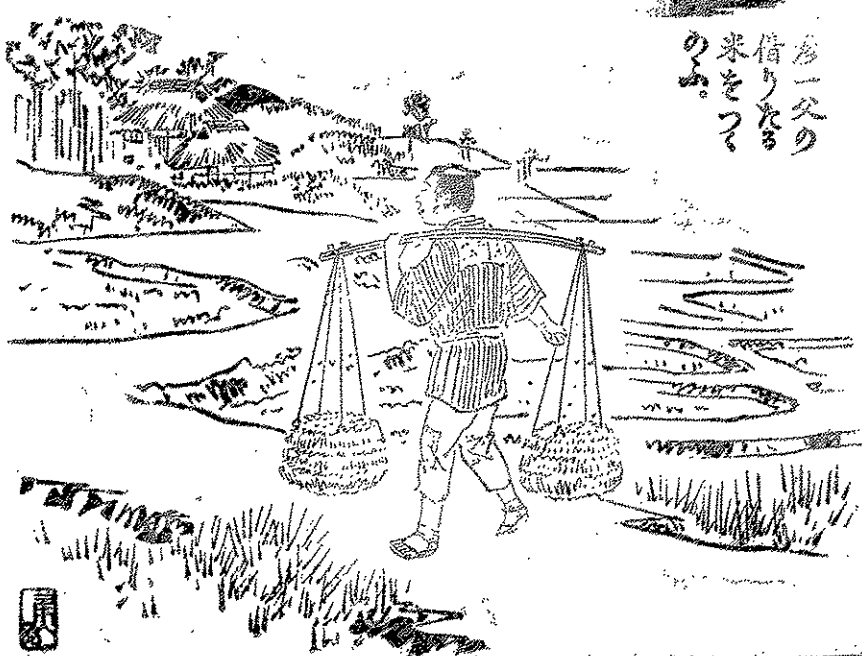
今更降参致しがたし」とて肯はざりき。偶村重の臣に、秀吉を殺して、信長の力をうがんとすすめたるものありしが、村重其の言を用ひず、酒肴を出して、厚く秀吉をもてなしたり。後村重城をのがれて、安藝の國にかくれおけるを、秀吉呼びむかへて、厚く扶助したりとぞ。朋友の交りは、かくころありたけれ。朋友の朋友に交るには信を貴ぶ。

第七課 信實

借りたるものは、必ず返すべし、若し時をたがへ、約にふかば、信を失ひて、世に立ちがたきに至らん。

昔筑前の國に、彦一といふものあり、幼くして、父を失ひしが、成長

彦一父の借りたる米を返す



の後、父が米を借りて返さざりしことを聞き及び、其の米に利息をうへて、貸し主に返したり。貸し主は、「もと深切の心にて、貸したることなれば、うれには及ばず」とて受け取らず、互に久しく譲りあひしが、遂に領主のさばきにて、借りたる米のみを返すことにして、雙方のこころざしをなしたり。約はうむくべからず、約せしことあらば、久しといふとも忘るることなかれ。

第八課 節義

一すぢに義を重んじ、我が身艱難にくるゝむとも志しをかへざるを節義といふ。凡る臣の君に事へ、婦の夫に事ふるに、節義を以て貴しとするは、人のよく知る所なれども、此の事は、唯君臣夫婦の間にのみ、大切なるにあらず、すべて人と交るにも、飲くべからざることなれば、常常身を省み、行ひをはげみて、節義を欠かざるやうに

心がくべし。

高橋紹運は、世世大友氏に屬して、筑前の國岩屋城を守れり、後大友氏衰ふるに及び、島津義久、紹運をまねきけるに、紹運は、盛衰を見て志しを變ずるは、武士の屑とせざる所なりとて、城にこもり、島津の大軍と戦ひて、潔く討死したりとぞ。かばねをば岩屋のこけにうつみてぞ、

雲井のうらに名をとどむべき。

第九課 節義

萬づの事如何に才能ありとも、君にうむきて難をのがれ、夫をすてて人にうたがはば、其の餘は見るにたらず、一たび節義を失ひて、利ある方につき、害ある方をのがれ、或は死ぬべき時に死せざれば、一生の名の穢れとなり、後代までも、惡名を流すものなり。凡る人は、生前の血肉をのみ、我が身と思ふべからず、死後の善惡の名も、亦我が身の

内なることを思ふべし、生けるもの必ず一たびは、死せずといふことなり、されば節義を失ひて、かひなき命長らへ、富貴を極むとも、何の樂しみかあらんや、是人の勤むべき大節なり。

豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。

いのちより名こそをうけれ武士の、

道にかふべき道うなれば。

傳六貸金を
とらずして
證文をかへす



圖

第十課 博愛

昔江戸に、質屋傳六といふ人あり、常に人を憐み、物を施すことを好めり。質を入るるものの中、殊に貧しきものあれば、別に金を與へて、其の難儀を救ひ、又故郷の名主、家衰へ

て田地を質入れし、久しく其のままにすぎけるを、質物を返して、其の金を取らず、且其の名主、田地を賣らんとしければ、價をまいて之を買ひ取り、故郷の社寺に寄附し、親族に分ち與へたり。此の外にかかる善行多かりしかば、寛永三年、上より褒美を賜はりたり。人を恵み救ふことは、必ずしも財を用ふるの多少によらず、ただ人の難儀を救へば、其の功大いなり。

第十 課 光陰を惜む

凡る事は、皆ひまを用ひて成るものをなれば、ひまほど身のたからなるものはなす。

昔登蓮法師といふ人あり、人とかたらひけるうち、己れのいふ事ありければ、雨のふりきるをいとはず、物りのもとにゆきて、これをたださんとせり。人人これを止めて、「雨止みてのちにせよ」といひに、法師、「歲月は流るるがごとし、雨のはるるを

まつべきにあらず」とて、簑笠をかり、雨を冒して、其の事を問ひにゆきたり。

林羅山は、大晦日に、其の門人きたりて、明春よりある書物の講義をききたうと乞ひに、「汝誠に講義をききたくば、來年をまつべきにあらず」とて、其の日より直ちに講義をはじめたり。

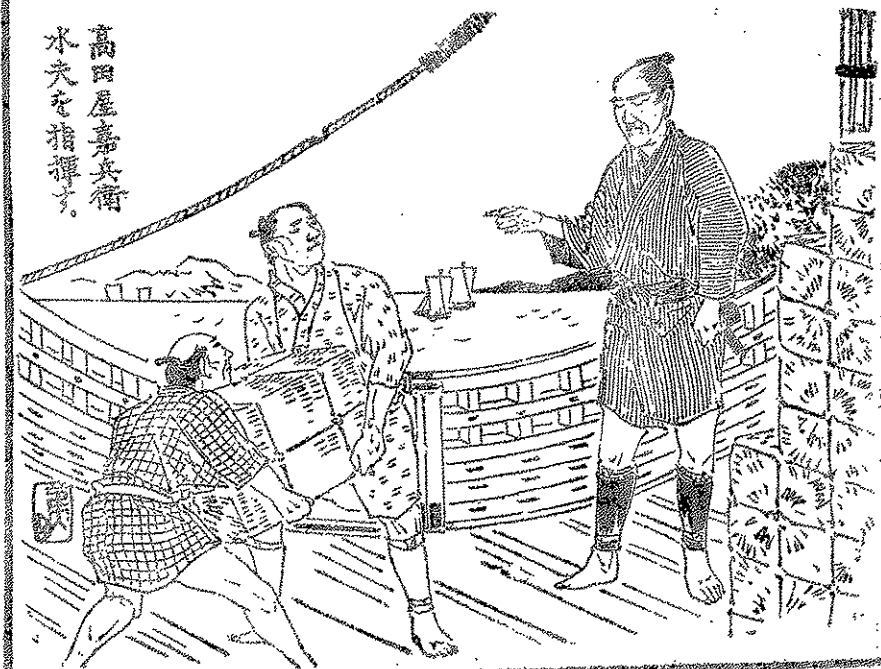
一日一日の効を見るべし、一月一月の効を見るべし。

第十二課 進取

凡る事をはりめ、業をくはだつるに、百折撓まず、千挫屈せざるの精神あらんには、何事も成らずといふことなり。

昔高田屋嘉兵衛といふものあり、少年の頃

高田屋嘉兵衛
水夫を指揮す



身を立てんどの志を起し、先づ水夫となりて、船乗りのわざを習ひ、遂に大船をつくり、自ら運漕の業をひらき、兵庫と松前との間を往来せり。後幕府嘉兵衛のよく海路を知れるを以て、命じて千島の航路をひらかしむ。嘉兵衛勇みて千島に到り、土人をなづけ、漁場をひらき、國益をれこしければ、是より家益す益す富みたり。精神一たび到れば、何事が成らざらん。

第十三課 攝養

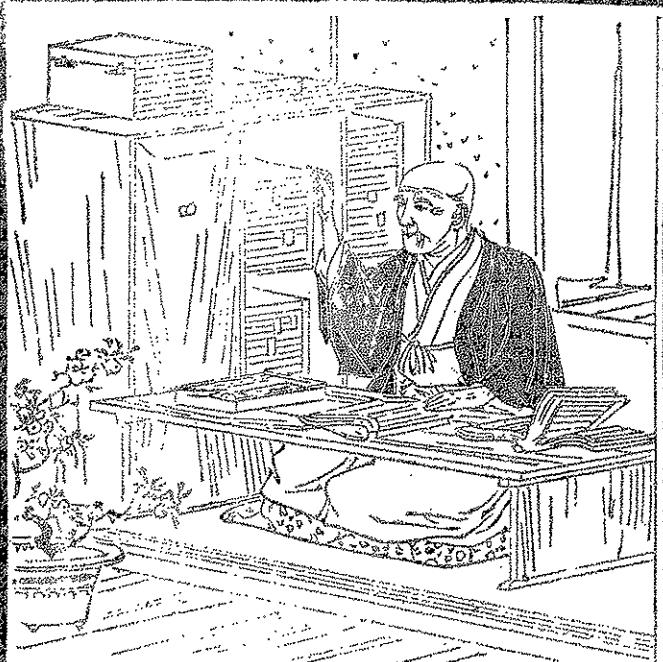
人は、毎日必ず適宜の運動を爲して、身體の健康をはかるべし、もつ美食を好み安佚にふけり、運動をれこたる時は、筋肉漸くたどるへ、随ひて身體の健康をうこなふべし。

身體に垢つきたるは、大いに健康に害あるものなれば、務めてこれを清くすべし。汚れたる衣服を着るは、身體に垢つきたると同じことなれば、心を用ひてこれをあらふべし。

多く心をつかひ、思ひをくるくむる時は、身體の健康をうこなふべし、されば常に心を平かにし、思ひを少くして、怒りと慾とをつつしむべし。

人身は、至りて貴く重くして、天下四海にもかたがたきものにあらずや、然るに是を養ふ術を知らず、慾を恣にして、身を亡し命を失ふこと愚なる至りなり。

佐藤信淵農
業書を著す。



第十四課 公益

佐藤信淵は、幼くして
國の益をはかり、人を
すくはんと志し、
いだけり。

年十三の時、父に従ひ、
國國をめぐりて、産
物を求め、耕作を學
び、椎茸を造り、銅を

製する法等を習ひたり。

父の死せし後は、江戸に出て、地理を究
め、測量の術を學びたり。成長の後、西國に
赴きて、水害をふせぎ、田畑を耕し、新田を
ひらき、牛馬をかひ、鹽を製する等の道を
説きて、多くの人を益し、後又農業の書を
著し、廣く之をわかちて、世の益をな
たり。

公益を廣め、世務を開き。

第十五課 義勇

心雄雄しく、力強きものを勇者といふ、勇者の類は多けれども、義を重んじて事に當り、國の爲めには、死をだもかへりみざるものを、眞の勇者とするなり。

昔支那の元といひ一時、其の國の大軍、我が國に攻め來り、筑前の海に戦艦をつらね、進みて海岸に押しよせけるが、我が軍少しもたふれず、防ぎ戦ひて之を退けたり。

此の時、河野通有は、小舟にのりて、敵の大艦にちかづき、ほば一らをたふしかけ、其の艦にをどりこみ、大刀をふるひて、敵兵をやぶり、大將をとりこにして、ひきあげたり。やがて其の首をきりて、朝廷に獻づけければ、龜山上皇深く通有のはたらきを嘉して、領地數處を増しあたへたまへり。

千萬づのあだにむかひて奔り猪のかへりみせぬを心ともがも。

第十六課 國體

初め皇祖天照大神の、皇孫瓊瓊杵尊をして、
國家を治めしめたまはんとせし時、詔り
して、豐葦原の瑞穗の國は、吾が子孫の君
たるべき地なり、汝行きて治めよ、寶祚の
隆んならんこと、天壤ときはまりなかる
べしと宣へり。是より今日に至るまで、
一系の皇統、連綿として更ることなく、皇祖
の神胤、常に皇位を承け、一かのみならず、

列聖能く恩德を施して、臣民を憐みたま
へり。而して我等臣民は、正しく皇孫に
事へ奉りし群臣の子孫にして、よく皇室に
仕へ、永くかはることなし。凡そ世界に、
國は多けれども、かくの如くに萬世一系の
皇室をいただき、君仁に臣忠なる國は、我が
國の外にあることなし。

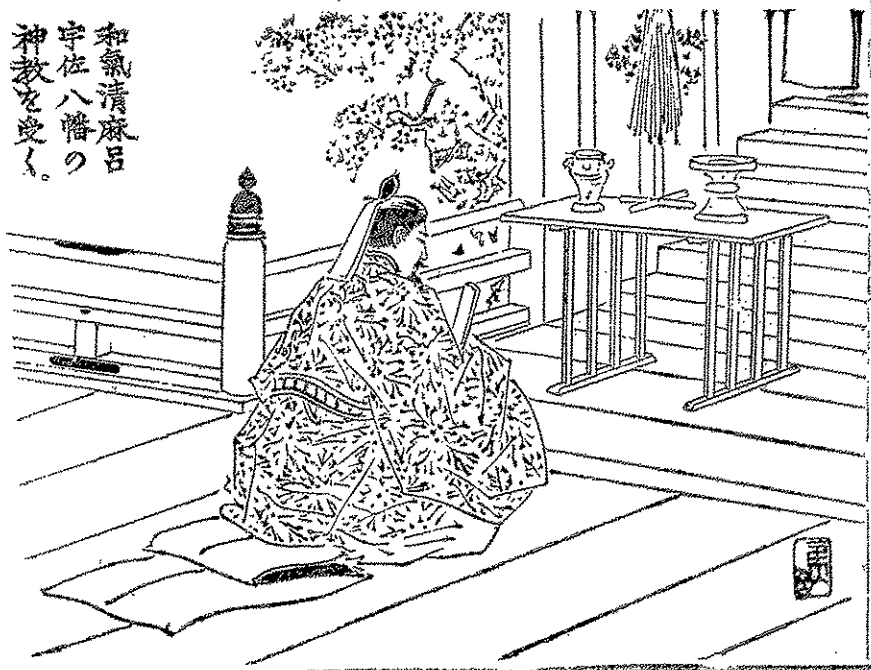
織り出せる高麗唐土の品はあれど、

大和錦に若くものづなまき。

第十七課 忠君

忠は、身を興一家を著す。
孝謙天皇、太宰主神某
の言をきこめ、竊
に位を道鏡に傳へん
と、和氣清麻呂を
て、更に宇佐八幡の神
教を乞はしめたまへ
り。清麻呂心に道鏡の

和氣清麻呂
宇佐八幡の
神教を受く。



無道を惡み、死を決して宇佐に到り、神教
を受け、歸り來りて、我が國家は、天地の開
け始めより此のかた、君臣の分明かに定
れり、天つ日嗣ぎは、必ず皇胤を立て、無道
のものは、速かに除くべしと告げさせた
まへり、と奏しければ、道鏡大いに怒りて、
清麻呂を大隅の國に流せり。翌年光仁天皇
位に即きたまひ、道鏡をつみ、清麻呂を
召しかへして、官位を進めたまへり。

第十八課 勤王

楠正行は、忠孝の心深かり人なり、父正成の志をつぎて、吉野の行宮をまもり、屢兵を出して賊を破りければ、足利尊氏大いにたふれ、家臣に命じ、大軍を發して攻めよせたり。正行心を決し、行宮に至り、奏して曰はく、「臣天性多病なり、もろ微功をもたてずして、死することあらんには、上は、不忠の臣となり、下は、不孝の子とならん、今賊大軍を舉げて來り

侵す、是臣が力をつくすべきの時なり、最後の思ひ出に、一たび龍顏を拜し奉りたく」と奏ければ、後村上天皇、御簾を高くまかせて、近く正行を召し、「朕は、汝を以て股肱とす、汝自ら其の身を輕んずることなかれ」と宣へり。正行感泣して、御前を退き、先帝の御廟を拜し、一族の姓名と一首の歌とを書いて、吉野を出で、遂に四條畷に於いて、大軍と戦ひて討ち死にしたり。我が臣民、克く忠に、克く孝に。

第十九課 忠愛



昔元の、我が國をうかがはんとせし時、鎌倉の執權北條時宗、屢其の使ひを退け、遂にこれをきりかば、元主大いに怒り、大軍を發して、我が壹岐對馬を掠め、進みて九州を侵さしめたり。

時宗は、かねて期したる事なれば、少くもさわがず、今を傳へて、これを防がしめたり。此の時河野通有は、敵將を虜に、草野七郎は、敵艦を焼きうちて、大いに國威をあげたり。程なく暴風大いに起り、敵艦悉く覆没しければ、我が軍之に乗じ、急に撃ちて元兵をみなごころにせり。

一旦緩急あれば、義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。

第二十課 國法

今日吾等が、安く業をいとなみ、樂しく世を
わたることを得るは、素より聖徳のふかきに
由ることなれども、又別に國ををさめ、良民
をまもり、惡人をつみする所の掟を設けさせ
たまひて、吾等をして、之をまもらゝむるに
由るなり、されば吾等は、常に國憲を重んじ、
國法に遵ひて、永く泰平の樂しみを享けん
ことを心がけざるべからず。

善右衛門といつる人は、能く國法を重んじ
たる人にて、納税賦役等、一たびも時をたが
へたることなし。常に弟どもを誡めて、今日
安泰に家族を養ふことを得るは、皆領主の
恩澤なり、されば常に耕作を勵みて、納税の
務めを怠るべからず、賦役あらば、期をたが
へずして、早く出づべし、といひたり。國
民たるものは、誰もかくころありたけれ。
常に國憲を重んじ、國法に遵ひ。

明治廿六年六月十日印刷
同 年六月廿七日發行

定價金五錢五厘

著作者

渡邊政吉
本郷區森川町壹番地

發行兼印刷者

金港堂書籍株式會社
日本橋區本町三丁目十七番地

代表者

原亮三郎
下谷區龍泉寺町四百十番地

賣捌所

金港堂
大阪市東區南本町四丁目
金港堂
宮城縣仙臺市國分町五丁目

版權所有

